

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	シュタイナー教育思想の哲学的基盤（４）：「精神」と「自由」の獲得に向けたヘーゲルの認識論（後半）
Author(s)	衛藤， 吉則
Citation	HABITUS , 21 : 17 - 26
Issue Date	2017-03-23
DOI	
Self DOI	10.15027/42914
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042914
Right	
Relation	



シュタイナー教育思想の哲学的基盤(4)

—「精神」と「自由」の獲得に向けたヘーゲルの認識論(後半)

衛 藤 吉 則

(広島大学准教授)

【章立て】

第一章 シュタイナーによる認識論的格闘

—ヘーゲル以前：カント、ゲーテ、E.ハルトマン、フィヒテ

第二章 「ゲーテ的世界観」「汝自身を知れ」の哲学者としてのヘーゲル

第一節 「ゲーテ的世界観」の哲学者としてのヘーゲル

第二節 「汝自身を知れ」の哲学者としてのヘーゲル（前号はここまで）

第三章 シュタイナーによるヘーゲル認識論の理解（本号はここから）

第四章 ヘーゲルの立場との相違点

総括

第三章 シュタイナーによるヘーゲル認識論の理解

ここでは、ヘーゲルの認識論について、シュタイナーが注目する「思考」作用に焦点を当て、シュタイナーの言に基づき描出してみたい。

シュタイナーは、自我の存在論的証明を通して理念的に客体をも追求したフィヒテと異なり、自我意識の変容を軸に、「精神」としての高次の「思考」作用を通して主客の即応連関を解説したヘーゲルの以下の考えに共鳴する。

「人間は思考する存在なので…経験的世界観から神へと上昇する(erheben)権

利を譲らないであろう。この上昇は、その基盤に、思考による一たんなる感覚的・動物的な作用を超えた一世界観照以外のいかなるものももたない。感覚的なものを超える思考の上昇、…感覚的なものを中断して(mit Abbrechung)なされる超感覚的なもの(Übersinnliche)への飛躍(Sprung)、これらすべてが思考そのものであり、この移行が思考にほかならない」¹⁾。

フィヒテが通常感覚を超えた「新たな感覚」による理解を予感しつつも、「認識する自我」を展開できず、神秘的な知的直観の容認によって自我作用を分断したのに対し、ヘーゲルは、上の言葉に示されるように、あくまでも感覚世界と超感覚の世界とを現実的な思考の展開において架橋することを構想していた。こうしたヘーゲル的認識は、シュタイナーによって、ゲーテ的メタモルフォーゼを自己意識—精神の連続的な展開として認識論のうちに体系化するものと、理解されたのである。

そして、純化した精神をフィルターとして高次の感覚が事物の上に光を当てれば、事物の「本質」が照らし出されるという真実を承認しようとしなない不可知論者に対して、シュタイナーはこう反論する。内的な思考体験の道に歩み入った者のなかで、事物は、垂直軸的な存在変容の度合いに応じる形で、素朴な実在を越え創造的に真なる姿を立ち現す、と。それは、純化した深い洞察力と表現力をもつ詩人や学者や技術家が主客の溶解体験のもとに現象の本質を自己の内で感得し表に紡ぎ出す営みにも近い。シュタイナーがあげるつぎの内観体験の例は、そうした〈立ち現れ〉の事態を解説したものとなる。

「外に木が立っている。わたしはこの木を自己の精神のなかで把握する。わたしは己の内なる光を自己が把握したもののうえに投げかける。わたしの内部で、木は外界に存在するもの以上のものになる。感覚の門をとおって木が

ら入ってきたものが精神的内容のなかに受け取られるのである。木の理念的対応物がわたしのなかに存在する。この理念的対応物は、木について、木が外界でわたしに言い得ないことを非常に多く語る。わたしに照らされることで、木が何であるのかはじめて明らかになる。木は外界に存在する唯一の存在ではなくなり、わたしの内に生きる完全なる精神世界の一部となる。木は自らの内容を、わたしの内に存在するほかの理念と結びつける」²⁾。

この説明によれば、「所与」は、精神との感応を可能とするまでに高まった深い感覚を介して、内側で精神の光に照らされ内在的対応物と呼応し、その精神像を立ち上らせる。それがシュタイナーの言う「超感覚的な思考内容(通常の感覚を超え純化された感覚に基づく精神的思考内容)」の内実である。

では、こうした精神科学的な〈内的な理解の確からしさ〉は、主観性の排除と同時に客観的な妥当性を謳う自然科学の〈明証性〉に比して、いかなる有効性を有しうるのだろうか。

事実連関の記述に徹する自然科学の抽象的客観的な認識内容に対して、シュタイナーは、内観としての〈思考〉が描き出す生き生きとした〈現実〉的で〈具体的〉な認識的内容を支持する。そして、そうした思考枠組みを、かれはヘーゲルの内に見出すことになる。シュタイナーは、あらゆる認識作用は、もし、人間の内で生きた現実性を獲得しなければ、生命のない、硬直した、抽象的で観念的な産物にとどまると考えている。ヘーゲルもまた、そうした抽象的な認識の産物を「影の領域(Reich der Schatten)」と呼んでいる。両者の場合、認識における〈現実性〉は、所与を材料として人間が〈思考〉しつつ、自らに内在する真実在との理念的感応を体験するなかで担保されると考えられた。しかも、そうした恣意的な飛躍をはさまない純化した現実の内観体験は、たんに個別の個人的意義にとどまらない宇宙的意義をもつことになるという。さらに、そのよ

うな〈特殊を窓口として立ち現れる具体的普遍としての宇宙的意義〉は、人間の自己認識において、その頂点に、その完全性に到達し、この内観的な精神の営みによる完全性なくしては、その本質は断片にとどまることになることとされた。

加えて、こうした本質と現実的な人間認識とをつなぐ動的な世界観は、ヘーゲル、シュタイナーともに「自由」の問題と重ねみられることになる。ヘーゲルは、シュタイナー同様、自由が生まれながらにして未来永劫人間に与えられた神の賜物ではなく、人間自身が自己の発展経過において漸進的に到達する結果であるとみなした。自由の獲得を実にする人は、外界や低次の感覚・欲求に依拠した〈不自由な〉生き方から、内的な世界へと踏み込み、そこを経てさらに精神的な本質世界の把握へと上昇していく。そうすることによって、自己を外界から独立させ、自らの内的な精神の本質に従うことができるというのである³⁾。

それゆえ、シュタイナーは、人間にとって「一般的な自由」を語ることはできず、「わたしたちは、自由か不自由か」という問いに、「自由でもあり、不自由でもある」と回答するのである。人間は精神的な存在へと変容する以前は不自由である、という。そして、不自由な意志を自由の性格をもった意志へと変化させることが、人間の個体的な上昇、進化であると考えている。シュタイナーは、そのことをつぎの言葉でもって語っている。

「自由は人間存在の事実として最初から存在するのではない。自由は目標なのである。自由な行為によって、人間は世界と自分との間の矛盾を解く。…自分と他者との間に不調和があれば、それはまだ完全に目覚めていない自己のせいだと感じる。…分離された自我として、自ら全我(All-Ich)へと拡張していかなければ、最高の意味において人間であるということとはできないであろう。本源的に自分のなかにある矛盾を克服するのが、人間の本質に属することで

ある」⁴⁾。

つまり、シュタイナーにおいて内観とは、自己自身、あるいは自己と世界(他者)との不調和とその原因への〈気づき〉をさす。しかも、その〈気づき〉は、「相手にとっても自己にとってもそれが自由であるか」という自由の実現に向けた自己内対話として焦点化され、自己の痛みを通して深まりをみることになる。ここにおいて、主客は〈未分節(無意識的様態)〉の状態から〈分節(対象意識)〉の状態に至り、そこでの認識限界の先に、吾我(とらわれの自己)の否定、無知の自覚、無分別知という〈認識と存在のゼロポイント〉を経て、本源的な統一である〈主客合一(無分節かつ分節の二重見)〉の境位へと至る、と考えられたのである。

以上みてきたように、「認識と存在とモラルの一元的な上昇図式」を支持するシュタイナーの認識論は、きわめてヘーゲル認識論の構造に近いものといえる。こうした理念と現実とをつなぐ動的な世界観は、ヘーゲルとシュタイナーにとって、外界や低次の感覚にのみ依拠した〈不自由な〉生き方から、精神的な理念世界の把握・体现(具体的普遍)へと上昇していく「自由」の問題と重ねみられるのである(特殊を窓口に「高次の精神」と「自由」の獲得をめざす具体的普遍の構図)。

しかし、シュタイナーは、同時に、ヘーゲル論との違いも語っており、次章では両者における理論上の相違点について述べてみたい。

第四章 ヘーゲルの立場との相違点

これまでの考察によれば、シュタイナーの描く認識論の構造は、ヘーゲルのそれと類似なものであるということが出来る。しかし、シュタイナーは、ヘーゲルの国家論ならびに自由や絶対精神という物の見方に対して異議を唱えるこ

とになる。

ヘーゲルは、人倫(Sittlichkeit)の最高形態としての国家を構想した。かれにとって、国家は現実化された思考とされ、個々の人間は、民族精神が最高度に達した精神体としての国家のうちに部分として位置づくことになる。こうした国家観においては、〈個々の人間〉に、国家の枠組みを超えて自らの行為の目的と使命を決定する無条件の権利(自由)は認められない。ヘーゲルのいう最高の国家体制は、即かつ対自的(an und für sich)な人倫で結ばれた共同体を意味し、そこにおいてはじめて各個人もまた自由を享有できると考えられた。そして、国家におけるそのような自由の現実こそが理性の目的とされ、そのプロセスは世界における神の歩みと解された。つまり、ヘーゲルの場合、国家という枠組みは、古代ギリシアのポリス思想同様、人倫を考えるうえで越え出ることのない所属者にとって共通の究極的な場所ととらえられたのである。

しかし、シュタイナーは、そうした倫理的共同体としての民族国家(ヘーゲルの場合はプロイセン国家の問題として語られる)を最終目的に設定すべきではないと主張する。かれにとって、国家や民族の枠組みは保持されつつも個人の自由はそれを超えて展開し得ると判断された。シュタイナーの場合、精神の自由はどこまでも個人の問題であり、終着点が〈ある民族国家〉であるという見方は受け入れがたかった。

加えて、シュタイナーは、ヘーゲルによる「人倫—国家」論の限界を、ヘーゲルの描く「思考内容」と「現実の生」との結びつきの欠如のうちにみる。シュタイナーによれば、ヘーゲルは思考の展開において、けっして事物そのものにリアルにかかわることなく、もっぱらその理性的・思想的 content にかかわったために、生の現実を見通すことができなかったとされる。より詳細には、この事態はシュタイナーによってつぎのように付言される。すなわち、ヘーゲルは、世界考察においてつねに思考を追い求めたように、現実の生もまた思考の観点

のみから導出しようとしたために、不明確な国家理想や社会理想に対しても思考枠組みの中で戦いを挑み、自ら現存するもの(国家という現存形態)の擁護者を買って出ることになった、と⁵⁾。

シュタイナーの人間発達論によれば、不完全な個々の感覚存在は、理念世界と呼応しつつ変容・展開し、高次の心的作用である精神を介して自由の領域へと貫入していくものと考えられた。そこでは、ヘーゲルの絶対精神のように、完全な原初存在(Urwesen)がどこかわたしたちの外に確固として存在するということは想定されていない。シュタイナーによれば、存在するのは永遠の運動、すなわち不断の生成(stetes Werden)のうちにある原初存在のみ、と考えられた⁶⁾。そのような見方においては、いかなる外からの制約や枠組みとも相容れない〈自由な精神の展開〉が一貫して支持されることになる。そして、こうした根本態度に照らして、ヘーゲル哲学もまたその限界が指摘される。すなわち、哲学的思考操作のみによって構築されたかれの理論は人間の生の実態を掌握できず、最終的には血の気のない抽象に終わった、と。さらに、そこにおいては、世界内容のもっとも高次な形を各人の人格に求めず、国家や絶対精神といった外的なものに置いたために真の自由は実現されない、とも⁷⁾。

総括

最後に、本論文の前・後編を通じた総括をしてみたい。シュタイナーによれば、ヘーゲル哲学は、カント以降の観念論哲学において、ゲーテにみるメタモルフォーゼ(変態)の考え方を哲学体系において示した点で「ゲーテの世界観の哲学者」であると評価された。そこでの認識は、外から与えられる直観ではなく、現実の徹底した観察を基盤とする〈拡張的な感覚経験〉あるいは〈理念世界の浸透した経験〉といえる理念認識の体験であった。このような「理念世界の浸透した経験」という高次の認識体験において、知覚内容と概念は〈素朴実

在論的な次元)を超え、主観と客観は高みにおいて総合されると考えられた。

加えて、ヘーゲルは、ゲーテが疑いをいだき、踏み込むことのなかった自己認識(汝自身を知れ)に「最高のメタモルフォーゼ」があると考え、その原理を意識変容論として体系化した哲学者として位置づけられる。具体的には、ゲーテが自然と精神の観照から得たものを、ヘーゲルは自己意識の内に生きている明晰で純粋な思考に基づいて表現する点が、シュタイナーによって深い共感を得たのである。ゲーテがメタモルフォーゼにみる生成や発展の図式を自然過程の解明に限定したのに対して、シュタイナーとヘーゲルは人間精神をも含めた全宇宙に適用し、それを思考作用によって発展的につなぐことを構想したといえる。これは、フィヒテの自我論にみられるような自我作用と神的な知的直観との分断を意味せず、〈認識する自我〉の展開として、〈自己意識－精神(絶対精神との交替を含む)〉の連続的な変容のもとに理念と現実を一元的につなぐ認識論体系に位置づく。しかも、こうした理念と現実とをつなぐ動的な世界観は、ヘーゲルとシュタイナーにとって、外物や低次の感覚に依拠した〈不自由な〉生き方から、精神的な理念世界の把握と体现へと上昇していく「自由」の問題と重ねみられることになる。つまり、両者の認識論では、「精神」と「自由」の獲得に向けた具体的普遍的構図が語られるのである。

しかし、本論で確認したように、このヘーゲルの理論もまたシュタイナーにとって十分なものとはならなかった。シュタイナーは、〈即かつ対自〉的な共同体としての民族国家が人倫の最高形態として個々人の自由を超えて設定されるヘーゲルの「国家観」や、人為を超えて歴史を導くものとして規定される「絶対精神」、さらには人間の生の実態と乖離した哲学的操作のみに基づく「理論の抽象性」について異議を唱えることになる。シュタイナーにとって、精神の自由はどこまでも生き生きとした具体的な個人の人格に帰されるものであり、導き手が〈絶対精神〉であったり、理想的な共同体の枠組みが〈ある民族国家〉

であったりする外的で超越的な抽象規定は受け入れがたいものであった。

【凡例】

シュタイナーの著作からの引用は、シュタイナー全集単行版(Rudolf Steiner Gesamtausgabe)をGA、シュタイナー全集文庫版(Rudolf Steiner Taschenbücher aus dem Gesamtwerk)をTbの略号で示し、そのあとに文献番号を用いて出典を示すこととする。

GA…Rudolf Steiner Gesamtausgabe,1956～. Rudolf Steiner Verlag, Herausgegeben von der Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach/Schweiz.

Tb…Rudolf Steiner Taschenbücher aus dem Gesamtwerk, 1961～. Herausgegeben von der Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach/Schweiz.

GA18(Tb610) : Die Rätsel der Philosophie in ihrer Geschichte als Umriss dargestellt, Dornach 1985 [1914] . (山田明紀訳『哲学の謎』水声社、2004年)

GA7(Tb623) : Die Mystik im Aufgange des neuzeitlichen Geisteslebens und ihr Verhältnis zur modernen Weltanschauung, Dornach 1993 [1901] . (『新たな時代の精神生活における黎明期の神秘主義と現代的世界観とその関係』)

GA6(Tb625) : Goethes Weltanschauung, 1990 [1897]
(溝井高志訳『ゲーテの世界観』晃洋書房、1995年)

註

- 1) Tb610, S.235-236 邦訳230頁。In:Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse,1 teil, L.Henning(Hrsg.), Die Wissenschaft der Logik Berlin 1843. In: Hegel Werke, vollständigs Ausgabe in 21 Bänden,6.Bd.,2. Aufl., § 50, S.107
- 2) Tb623, S.252 邦訳28-29頁。
- 3) a.a.O., S.252 邦訳245頁。
- 4) a.a.O., S.37 邦訳50-51頁。
- 5) Tb610, S, S.244-246 邦訳239頁。
- 6) Tb623, S.248-249 邦訳242頁。
- 7) Tb625, S.205-209

The Philosophical Foundation of Steiner's Educational Thought (4)

:Hegel's Epistemology Directed to the Acquisition of 'Spirit' and 'Freedom' (Part 2)

Yoshinori ETO

Associate Professor, Hiroshima University

This thesis aims to clarify the structure of Hegel's epistemology as the foundation of Steiner's educational thought. According to Steiner, Hegel is a "philosopher of Goethe's worldview", as he systematized Goethe's metamorphosis theory in philosophy. However, while Goethe limited his theory of metamorphosis to the elucidation of natural processes, Steiner and Hegel applied it to the whole universe including human spirit, and explained it as a transformation process of thought. Moreover, for Hegel and Steiner, the dynamic worldview connecting such ideals and reality also functions as a theory on liberty. In other words, we aim to rise from a "freedomless way of life" relying on external objects and low dimensional senses to a spiritual ideal world. However, Hegel's theory was not sufficient for Steiner. Steiner disagreed with some of Hegel's concepts as follows: "a view of the state" set as the highest form of morality beyond the freedom of individuals, the "absolute spirit" defined as guiding history beyond human activity, and "the abstractness of the theory" based only on philosophical maneuvering deviated from human concrete reality. Steiner considered the freedom of spirit to be attributed to a vivid individual personality, which differed from Hegel who believed that the ultimate principle is "absolute spirit" and the ideal community framework is "one racial and ethnic nation". Thus, for Steiner, Hegelian external and transcendental abstract provisions were unacceptable.